

## 平成25年（第7回）みどりの学術賞 選考委員会委員長コメント

平成25年（第7回）みどりの学術賞の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術に造詣の深い学識経験者等約450名に対し、この賞にふさわしい候補者の推薦を依頼しました。その結果、約70名の推薦が得られましたが、分子・細胞レベルで植物の営みを研究している方から、地球規模で生態系の研究をしている方まで、実に多様な分野からお名前が挙がり、改めて「みどり」という言葉のもつ幅広さ、奥深さを思い知らされた次第です。

選考委員会は約半年をかけ、推薦のあった方々の業績を精査・検討した結果、最終的に2名の方を推薦することといたしました。お一人は、光合成過程の $\text{CO}_2$ 固定の研究で、クロレラなどの微細藻類を使って光合成過程で炭水化物を合成する「 $\text{CO}_2$ 固定」の研究を進め、 $\text{CO}_2$ 濃縮は炭酸脱水酵素が行っていること、微細藻類などは $\text{CO}_2$ 濃度を感知する機構があり、この働きにより $\text{CO}_2$ 濃縮を調節していることを明らかにし、「海洋バイオテクノロジー分野」を創設した宮地重遠博士であり、もうお一人は、絶滅危惧種のサクラソウを使って、生理生態学、昆虫による授粉様式の解析、個体群生態学的手法などを用い科学的知見に基づく野生植物の保全手法を開発し、また、侵略的外来種の生態影響、里山や水辺の生物多様性の保全と再生などに関する広範な研究を展開し、「保全生態学」として体系化した鷺谷いづみ博士であります。

今回の受賞者お二人の研究は、極めて優れたご業績であるとともに、いずれも我々人間が「みどり」とどのように関わって生きていけばよいか、その道筋を示された研究という点において共通しており、ここから学ぶことも多いのではないのでしょうか。選考委員会を代表し、両博士の永年にわたるご貢献に対し、心から敬意を表するとともに、このような「みどり」に関する学術が新たな知恵をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待し、念願するものであります。

平成25年3月8日

みどりの学術賞選考委員会委員長  
杉浦 昌弘